東京八王子西ロータリークラブ
会長賞

金井　史礼（かない　ふみのり）　長池小　５年生

作品名：「戦争」「原爆」そして「平和」を考えた夏
図　書：せんそうってなんだったの？

澤田満明様

はじめまして。僕は八王子市に住んでいる小学五年生です。

澤田さんが体験された戦争のお話『おねがいです、水をください』を図書館で借りて読みました。六十八年前の八月六日、広島に世界で初めて原子爆弾が落とされました。その時の山や川、人々の本当の様子が、わかりやすい言葉で、丁寧に記されていました。

読み終わった後、僕はとてもショックを受けました。自分の体に大地震が起こったように、気持ちがガタガタと音をたてて揺れているみたいでした。それは広島の鉄道員だった澤田さんが見た、あの時の広島の町の恐ろしさや苦しさが伝わってきたからです。僕が想像することもできないような、熱さやにおいが文章からどんどんあふれていました。

「ばく風が起こり、ガラスがとけるほどの熱さで、広島の町は一しゅんにして焼きつくされたのです。」という文がありましたね。ガラスがとけてしまう熱さ、町が一しゅんで燃えてしまう戦争とは、いったいどういうことだろうと考えているうちに、僕はもっと詳しく、戦争や原爆のことを勉強したいと思いました。それで澤田さん、今年の夏休みに両親と広島平和記念資料館へ行って来ました。

僕が最初に本の通りだと思ったのは、二階の展示フロアに入ってすぐの所にあった、被爆直後の様子を再現した人形のジオラマ展示でした。大人も子供も洋服が黒く焼けて、体の皮ふのあちこちがやけどで垂れ下がっていました。

「がれきの山、い黄のようなにおい。そしてたくさんのやけただれた死体…。火そうするため、なみだを流しながら死体を運ぶ手伝いをしたのを覚えています。」と澤田さんが書かれていましたね。本当に本当に文そのままの展示でした。高熱でぐにゃりととけた一升びんのガラスや、中学生が持ったままの状態で見つかった黒こげのお弁当箱が、戦争の悪を訴えてくるみたいでした。

展示物のひとつひとつをたくさんの人達が列を作って見学していました。ガラスケース越しに写真を撮っている外国人もいました。でも僕は、写真を撮ることができませんでした。「ぼくは、子どもたちが、うれしそうに汽車に乗るのを見たくて、鉄道員になったんだ。どうして、こんな子どもまでが、死ななければならないんだ。もういやだ。もういやだ！」という澤田さんの叫びが頭に浮かんできたからです。

写真を撮るのは悪い事ではないと思います。けれど写真を撮るというのは、記念に残すという意味もありますよね。あの時の広島の悲劇を、形に残すのではなく、二度とこんな事が起きてはいけないという思いにして、心に残すという事が大切なのではないでしょうか。

僕は、平和記念資料館に行ってみて、この本のタイトル『せんそうって　なんだったの？』の本当の意味がわかりました。それは、原爆で広島がどれだけ多くの命や、貴重な物を失ったかを考えると、戦争はおろかなことで絶対に起こしてはいけないことなんだよというメッセージだったんですね。

澤田さん、平和記念資料館の入館料は大人五十円、小人三十円でした。僕は「ずい分安いなあ、どうしてこんなに安いのかなあ？」と考えました。きっと、一人でも多くの人に来てもらって、原爆のひどさや戦争の恐ろしさを知ってもらいたいからなのだと思います。

澤田さんの貴重な体験談を通して「戦争」「原爆」そして「平和」について、深く考えられた夏になりました。僕は、この本のメッセージを、他の人にも伝えていきたいです。ありがとうございました。

平成二十五年　八月